

「……い、起き……」

誰かの呼ぶ声。それが発せられるのが夢か現実か、ブランカには区別が付かない。一つ言えるのは、『記憶に無い』声だった。

(なら、夢かな……)

そう結論付けてみるものの、一度意識を始めると、休息を十分に取った頭は目覚めへと向かうもので、ブランカはゆっくりと目を開いた。

「あ、起きた。やあおはよう」

鮮明に聞こえる、少年のような少女のような、聞き慣れない声。しかしブランカが起き上がって見回しても、部屋の中には自分以外誰も居ない。窓からだろうか、蝶が一匹、机の上に置かれた本に留まってゆっくりとその翅をひらひらとさせている。

(……蝶って喋らないよね)

「ふーん。物知りだね、キミ」

蝶が本から飛び立つと、その翅の起こす風が留まっていた本がめくれる。飛ぶ姿はゆったりとしており、ブラ

ンカにはその羽ばたきが飛んでいるのとは無関係であることに気付いた。

「でも残念、ボクは喋ることができる。ならボクは蝶じゃない。そうだろ？」

声の主はブランカの目の前をふわふわと飛ぶ。黄金にも白銀にも見える鱗粉が舞い落ちていくようにも見えるが、床に落ちる前にどこかへと消えていく。

「キミはどうやら精霊が見えるみたいだ。この大陸じゃ珍しい人に会えて嬉しいよ」

「せい、れい……？」

聞き慣れない言葉に首を傾げると、蝶は更にブランカに近づいてくる。

「そう、ボクはルナって言うんだ。お礼をしようと思っ
て」

お礼、と言われてもブランカには身に覚えのない話。頭の中の疑問符は増えるばかりであった。ルナと名乗る蝶の姿の精霊は本へと舞い戻る。それは昨日ユノが読んだ読んでいた魔導書であった。

「ボク、魔女のせいでの魔導書に閉じ込められてたんだ。でも昨日、キミの……親？ 先生？ とにかく、青い髪の秘術使いのおかげでやっと外に出られたんだ！
ありがとね」

「青い髪……ルークさん？ なら直接ルークさんにお礼すれば良いじゃないですか」

ルナはパタパタと翅を震わせながら声を張り上げる。
「だーかーら、ボクを認識できるのはキミくらいしか居ないの！ 彼の代わりに、キミにお札をさせて欲しいんだってば」

「……そう、ですか」

分からないことが分からないまま、ブランカは諦めて聞くに徹することにした。ブランカが寝台に座り直すと、ルナはまた飛び立ち、くるくると飛び回り始めた。

「お札になんかしてあげるよ。何か困ってること無い？ ボク、探しものとか得意だよ」

ブランカは真っ先に出かかった言葉を、喉の奥へとしまい込む。

「……強くなりたい、とか」

「……『記憶』じゃなくて良いの？」

精霊に隠し事はできないようだ。ブランカの視線を落とした先、ブランカの握りしめた手の上に、ルナは舞い降りた。

「まあ今のボクには無理だけど。もう少し『ボク』を集めない」と

「……いっぱい居るんですか？」

恐る恐るブランカが聞くと、なんてことの無いかのよう「うん」と軽い返事が返ってきた。

「まだまだボクは色んな魔導書に封印されっぱなしで困ってるんだ。たぶんあと十冊くらいだけど、どこに他のボクが居るかも分からない。でも……あ、誰か来た」
ルナがそう伝えたのと同時に、戸を叩く音がした。

「ブランカ、起きているのか？」

戸の向こうからはルークの声がかすかに聞こえる。ブランカがルナに目をやると、「アイツにはボクが見えないから好きにすれば？」と気ままに飛び回り、まったく意に介さない。

「はーい」

ブランカはパタパタと小走りで部屋の入り口に向かい、戸を開けた。

「おはようございます、ルークさん」

「……よく眠れたようだな」

そういうルークの目の下には隈ができ、瞼も重そうにゆっくりとした瞬きをしている。

「ルークさんは……」

ブランカが聞ここうとしたとき、ルークは欠伸を一つ、手で押さえつつ溢した。

「ふあ……昨日ユノに部屋の寝台を占領され、仕方なく床で寝たんだが……何度経験しても慣れないものだ」

ルークは体が凝ってしまったのか、肩を回して解そうとしている。ブランカは魔物との戦闘後よりボロボロそうなるルークを部屋に招き入れ、ユノの使うはずだった寝

台まで引つ張っていった。ルナはそんな二人にお構いなしに飛び回り、とうとうルークとぶつかりそうになる。しかし、ルナは一度ルークの身体に潜ったかと思えば、背中側で舞い上がっているのが見えた。この不思議な現象を目の前にして、ブランカは目を見張ったが、ルークは何事も無いかのように平然としていた。「へへ、ほらね」とルナは機嫌良さそうに笑い声を上げる。

(……ルークさんに見えてないって、本当なんだ)

「……口元が緩んでいるが、何か言いたいことがあるのか？」

ルークに指摘され、ブランカは驚きで開いていた口をパク、と閉じる。しかし言いたいことが無いわけでもなく、改めてルークに言葉を投げかける。

「少しでも寝台で休んで元気になってください。今日も教えてもらいたいことがいっぱいあるんですから」

普段なら『引つ張るな』と言われて上手くいかないものも、今日この瞬間、ルークはふらふらと引かれるままに付いて来て、寝台に腰かけた。

「……すまない、気を遣わせたな」

ルークはゆっくりと横たわると、そのまま目を閉じた。

「ユノも起きて、来ないだろう。朝食は、外で食べるなり、買ってくるなり、好きにしろ……昼までには、起きる……」

そのままルークはブランカの目の前で寝入ってしまった。その頬に、ルナが舞い降りて鱗粉を散らす。

「ちよっと、ルークさんの寝る邪魔しちゃダメだよ」

ブランカはルナを掴もうとするが、先ほどと同じく、指はルナの翅をすり抜けていく。

「邪魔してないし。それよりさ、食べ物買いに行くんでしょ？ 外でお喋りの続きしよーよ、ブランカ」

ルナの気ままな言動に、ブランカは一抹の不安を覚えた。

まだ日が昇ってからそう経っていないミナートは、まだ開いていない店の方が多く、また歩いているのも開店準備を急ぐ商売人、職人たちがちらほらと居るばかりであった。ルナはブランカの前をあちこち飛び回って感嘆の声を漏らす。

「わぁ、ボク本当に自由になったんだなぁ」

表情は窺えないが、軽やかに飛び回って喜びを最大限表現していた。ブランカはルナを目で追いつつ、空いてる店を探した。

「ルナ……さん？ ……精霊ってご飯食べますか？」

「ご飯？ そう言えば食べれるのかな、一口分試させてよ」

そう言うのとルナはゆっくりとブランカに近づき、ブランカの歩く速さに合わせてふわふわと飛び始める。

「で、さっきの話を続き、『ボク』が封印された十冊の魔導書を探すのを手伝ってくれるなら、ボクもキミのしたいこと、何でも手伝うよ。どう？」

（私はルークさんとユノさんのお手伝いをしなきゃ、でも……）

「……私の記憶、ルナさんに力が戻れば、取り戻せるんですか？」

ルナは静かに飛んでいる。ブランカは固唾を飲んで返事を待つ。

「本来のボクにできないことなんか、無い。任せてよ」

ブランカは完全に信じ切ったわけではない。ただ、ブランカには信じる理由があった。

「私ができることは限られてますが、きっとこの先魔導書に触れる機会はたくさんあると思うので、一緒に旅をしましょう」

——掴むのが藁ではなく浮草なのであれば、共に岸に着くまで掴み続ける。ブランカは指を差し出す。ルナはその指に留まるしぐさを見せた。やはり脚の触れる感覚はない。

「仲間にしてくれるの？　ありがと。じゃあ今から敬語はナシね。よろしく、……せっかくなら自己紹介してもらおうかな」

ルナの言葉に、ブランカは一度首を傾げる。

「さっき名前言って……名前……」

ブランカは咳払いをして喉を整える。そして。

「……私はブランカ。よろしく、ルナ」

新しくできた秘密の仲間に、『名前』を告げた。

〈十九話へ続く〉